第10回社会教育委員会議	
開催日時	令和6年2月8日（木）　午後3時～午後5時
会　　場	クロスパルにいがた5階　交流ホール2　講師
出席者	【社会教育委員】 雲尾　周、佐藤　裕紀、白神　道子、小倉　荘平、 司山　園美、木村　いほ子、清水　隆太郎　計7名、　※敬称略 【意見交換ゲスト】 新潟市社会福祉協議会、新潟県国際交流協会、新潟市国際交流協会、 ゆめの木学園、新潟市障がい者基幹相談支援センター東、中央公民館、 特別支援教育課　計7名 【事務局】 教育次長、地域教育推進課長、中央公民館長、中央図書館長、 生涯学習センター所長、生涯学習センター職員3名　計8名
内　　容	1　開会 2　教育次長あいさつ 3　報告事項 ⑴教育委員と社会教育委員との建議報告会について 〇報告資料1に基づき、事務局より教育委員と社会教育委員との建議報告会について説明しました。 【主な質問・意見等】 ・質問や意見はありませんでした。 ⑵第35期新潟市社会教育委員会議建議について 〇事務局より、意見交換の流れについて説明しました。 【主な質問・意見等】 ・質問や意見はありませんでした。 〇報告資料2に基づき、小倉委員、司山委員より、建議の内容について発表いただきました。 4　協議事項 〇2つのグループに分かれて、建議の内容について意見交換しました。 【主な質問・意見等】 ＜子どもや若者の参画を促すネットワークグループ＞ 〇これまで公民館などで行われていた地域の活動について ・以前、坂井輪地区公民館では、「坂井輪ふれあい祭り」の際、公民館を利用している子どもたちがバルーンアートを作って、配っていた。また他の公民館では、公民館でバンド活動をしている若者が、夏休みに自分たちでバンドコンサートを企画・運営していたが、コロナ渦でこのような活動ができなくなってしまった。 ・現在、市として坂井輪地区公民館を坂井輪中学校の代替校舎として使えないか、調整しているところだ。今の状況では、今までやっていた地域の活動を行うのは難しい。ただ、コロナが明けて各地区公民館の事業も徐々に戻ってきていているため、居場所づくりにぜひ公民館を使っていただいて、それによって地域が盛り上がっていくというのは、大いに喜ばしい。公民館も積極的にバックアップしたいと思う。

内　　容	・コロナ渦になる前は、新潟医療福祉大学の学生ボランティアが小学校高学年の子どもたちを対象に、季節に応じたイベントを企画・運営していた。学生も子どもと一緒にいることで学びがあり、子どもも年齢の近い人に育ててもらうことができるため、良い活動である。「多世代がつながれるような活動」をぜひまた行ってほしい。 〇公民館の利用者推移について ・公民館の利用者推移について、令和３年に大きく減り、令和４年は少し横ばい、令和５年はコロナ前の８割ぐらいまでに戻ってきている。公民館としては、地域のコミュニティ協議会と一緒に事業をやろうとしても、まだコロナ前のように協力いただける状況が整っておらず、悩んでいる状況である。 〇公民館の利活用、移動方法について ・インプット型の活動や、アウトプット型の活動を公民館だけでしようとすると、公民館に比重がかかってしまう。 →例えば、ひまわりクラブが、活動場所が狭いため、学校を活用しようと思っても、学校の先生方の退勤時間が合わず、思うように使えない。また、公民館を利用したいと思っても、そこに行くまでの交通手段がなく難しい。区バスのように、子どもがちょっと安く乗れるミニ型のバスのようなものがあれば、先生と子どもが乗って公民館に行って、活動できる。大人側が全部企画して場所も提供しようとすると、負担が大きいため、うまく交流できるツールがあると、地域にある財産がもっと上手に回ると思う。 ・公民館には、大人も学生も自由に行けるため、ひまわりクラブも、その人たちの手を借りることができ、色々な学びもある。「怖い」という思いは「知らない」から生まれると思う。 ・地域の中で、子どもが多世代の人と関わっていくには、やはり「心理的安全性の担保」が必要である。公民館には「平等性」の雰囲気があり、その場で交流ができたら、うまくいくのではないか。 ・ひまわりクラブの子どもたちが公民館に行き、いろんな人がいることを知って、共存することで、互いに折り合いをつけることを学べるように、ひまわりクラブと公民館を行き来できるようになってほしい。 〇子どもふれあいスクールとひまわりクラブの一体化 ・「子どもふれあいスクール」は市内の小学校 106 校のうち、68 校で行っている。市としては、ひまわりクラブと子どもふれあいスクールが一体となって「できる部分を重ねていきましょう」ということを推進している。 ・ひまわりクラブも児童館も、とても狭いスペースで子どもたちが過ごしている。そのような環境にいると、自然と子どもたちが荒れてしまう。公民館や図書館は、高校生などの勉強の場として主に利用されており、大声を出そうとすると勉強の邪魔になってしまう。子どもたちが伸び伸び過ごせるように、やはり小学校の空きスペースを普通に使えるようになるとよい。 ・「子どもふれあいスクール」の枠組みの中で、小学校の空きスペースの活用は割と行われている。ひまわりクラブの支援員や子どもふれあいスクールの方、地元のボランティアなど、信頼できる色々な大人の目があると、子どもたちは安心できるし、地域のボランティアもひまわりクラブの支援員の専門的なスキルを学ぶことができる。 ・本市の方向性として、空き教室を積極的に活用し、ひまわりクラブと学校の連携

内　　容	を強化しようとしているが、完全に一体化するのはなかなか難しい。 ・ひまわりクラブから外に出て学校や公民館などへ引率するにも、その分の人材が割けない現状もある。 〇中高生の図書館利用について ・中央図書館の学習室を利用する中高生は多いが、勉強するというインプット型の活動をするのみとなっている。中央図書館ではアウトプット型の活動として、「学生司書」という活動を行っている。興味のある学生に司書の仕事を手伝ってもらったり、本の紹介を書いてもらったりしている。しかし、受験があれば学生たちは引退してしまい、なかなか活動が広がらず、募集をしても人が集まらないという難しさがある。 ・図書館の学習室や公民館のロビーなどが、勉強をする中高生の居場所となっているかもしれないが、それが他の人たちの行動を制限するようなものであってはならない。公民館のロビーは、誰でも話せる場所であると思うが、学生が勉強しているからその場であまり喋れないとうのでは、本当に公共の場といえるだろうか。 〇子どもや若者支援のニーズについて ・近年、子どもや若者の家庭環境や背景が複雑になってきているため、外に出るエネルギーが少ない傾向があり、イベントにもあまり人が集まりにくい。中央図書館でのボランティア体験や、男女共同参画センターのプチお手伝いのように、「ちょっと行って、ちょっとやってくるもの」であれば、非常にニーズがある。 ・中学校内にある図書館は外れたところに位置しており、そこを目的として行こうとする人がいない。玄関や教室など目的とした場所の途中にあればいいが、意識的に行かないとたどり着けない場所にある。 ・子どもたちが本に興味を持つように、その子だけの絵本袋を作る、クイズを出すなど、色々なアプローチをしている学校司書もいる。 〇放課後デザイナーとの連携 ・自分たちで考えることも大事だが、図書館で勉強だけをしている子に対して、「なぜ本を借りないのか」、「どうしたらもっと本を借りてくれるようになるのか」聞いてみたい。 ・図書館だけでは考えられない課題のつなぎ手として、放課後デザイナーと相談することで、公共施設同士や、学校と公共施設との連携が見えてくるのではないだろうか。 〇公民館の団体登録について ・公民館は安心感があり、安価で借りられるメリットがある中で、「公民館はハードルが高い」という感覚を持っている方がたくさんいる。 ・公民館が「自分の居場所」になって、心理的に安全が担保されていれば、公民館に人が集まると思う。「お邪魔している感覚」では、人が根付かないと思う。小さいときから公民館が「公園」のように気軽に行ける場になるとよいのではないか。 ・公民館の団体登録は、規約や名簿など様々な書類を提出するため、ハードルが高い。例えば、公民館の「無料開放デー」を作ったり、団体登録の仕方をわかりやすく教えてくれたりする仕組みがあると、市民も使いやすくなるのではないか。

内　　容	＜共生社会の実現に向けた学びのあり方と取組のネットワークグループ＞ 〇障がい者と外国人に共通する課題 ・話していることが分からない、わかりやすい言葉を選んだり、視覚的な情報を提供する必要があるなど、障がい者も外国人も共通言語がなく、根本的な問題は同じである。 ・お互いがお互いのことをわかっていない。 ・情報があるだけでは不十分で、そこからちゃんとつなげて何か「仕掛ける（軸となる）人」、「導火線」が必要ではないか。 〇一緒に取り組む、楽しむことで地域とつながる ・新潟県立新潟よつば学園では、e スポーツを取り入れている。学校と社会福祉協議会が間に入り、生徒がその地域の高齢者や地域の人にやり方を教え、一緒に楽しむことで、地域とつながる取組である。 ・障がい者は支援される対象になりがちだが、支援されるだけでなく、主体的に取り組むことができるような仕掛けがあると、継続的に地域とつながることができるだろう。 〇好きなことにくっつけてトライアンドエラーする ・ワーキングメモリーとは、音声情報について入力し、それを保持して処理することであるが、その能力が下がっていると会話が成立しなくなるということが起きる。どんどんトライアンドエラーしながら答えて楽しむことが大事である。 ・本人のニーズが一番大切であると思うが、障がい者に必要なニーズが届いていない現状がある。保護者や支援者のニーズが入ってきてしまい、本人のニーズがわかりづらくなってしまう。 ・障がいのある子は、自分の様子を認知するのがとても難しく、言葉で表現できる子が少ないので、それを察してあげることが難しいと感じる。 ・何かやる時に好きなことにくっつけてあげるのが一番間違いない。自分の好きなことで一緒に遊んでくれた人、一緒にいる、関われた事実が、少し自信になったりする。 ・好きなことに寄り添ってあげられるような、ちょっとできそうなことや好きなことにくっつけて自信につながるようにしてあげることが大事だと思う。 〇公民館に来てもらうために必要なこと ・公民館には色んなサークル活動をしている人がいる。障がいのある子に好きなことを見つけてもらうためには、本人のやりたいことと公民館のサークル活動が一致すると、公民館にも来てもらえる。そのために公民館はどうしたらよいだろうか。 ・小さい時に行き慣れている場所だと、障がい者は安心する。 ・障がいがない方とは同じようにできないことが多く、一度嫌いになると結構嫌いになる方が多いため、やり方を工夫する必要がある。工夫次第でできることがたくさんあるので、できたことを褒めてあげる人がいると、どんどんやる気が出てくる。逆に言うと、つまずいてしまうと、次の一歩が出にくくなりやすい。 ・一つひとつのことに自信をつけていくことができる場になると、そのことが好きになり、その場にいることができるようになる。 〇障がい者がコミュニティの中に入るために必要なこと ・地域教育コーディネーターとして、障がいのある学生にボランティアとして事業

内　　容	所に行ってもらう際、受け入れる側に障がいがあることを伝えていないと、学校に問い合わせがくることがある。地域教育コーディネーター側にも知らされておらず、担任に聞いてみると、その子の障がいは顕著ではないから、あえて言わなかったという話もある。交流するうえで、どこまで受け入れる側に伝えるべきだろうか。 ・教員が障がい者のある子の行動モデルをある程度示す必要があると思う。障がい者のある子に伝える際には、音声情報だけでなく、動画や静止画など、その子に合わせた工夫が必要である。障がい者が公民館や地域のコミュニティと交流する際には、「間に入って情報提供を十分に行う」必要がある。 〇外国人支援において重要なこと、課題について ・新潟市国際交流協会など、新潟市内 15 か所程では、ボランティアによる外国人への日本語教育の取組を行っており、外国人に対する「日本語教育の空白地帯がない」という状態である。生活に困っている人の相談窓口も多言語で行っている。 ・外国人を地域につなげることがキーだと思う。「仕掛ける人」やアクションを起こす「中心的な人」が重要になると思う。 ・日本は申請社会であり、申請しないとそのサービスを受けることができない。外国人も障がい者も情報弱者であり、災害弱者であるため、どのように制度設計するかが究極の課題となっている。 ・技能実習制度のうち、特定技能 2 号の場合は、本人の家族の帯同が可能である。しかし、受け入れる企業側がその家族の面倒を見ることにはなっていないため、日本語が喋れない家族に対して、誰が生活をしていくためのサポートをするのかという問題がある。新潟市においても、これから増えるだろう外国人のために、サポートの準備をすることが重要である。 ・「外国人の学習支援の居場所の空白地帯」については、調査してみないとわからない状況である。 〇外国人の居場所について ・県内でみると、新潟市のようにしっかりと外国人の子どもへの支援を行っている市町村が少ない状況がある。 ・小学校や中学校、高校、大学を卒業した外国人の居場所がない状況が起きている。例えば中学校卒業者で高校に行ってない子や高校を卒業したが日本語が完璧ではない子など、そういった若者が「狭間」に落ちており、なかなか居場所がないという相談を最近受けることがある。 ・災害時の避難所でも、小さなことでいざこざが起きたり、災害の情報が届かなかったりする。 ・多言語で情報発信するとともに、「文化的な通訳」、「文化的にファシリテーションをする存在」が重要である。 5 その他 【非公開案件】 6 閉会 社会教育委員のあいさつ

傍聴者	0 名
会議資料等	・第 35 期新潟市社会教育委員会議（第 10 回）次第 ・報告資料 1　教育委員と社会教育委員との建議報告会について ・報告資料 2　第 35 期新潟市社会教育委員会議　建議 「社会的包摂の実現に向けた社会教育のあり方」　発表資料 ※報告資料 3 は非公開